

明治三十七年

日誌

青年會寄宿舍

1. Abotti Mathew
2. " Mark 4 Luke
3. Evidences of Christianity

明治三十七年正月

- 一日 朝食七時半
- 二日 ○○君外泊ス
○ ○招待セラル、写真ヲ見ル、余興ハトランプ、カルタ、名指シ ing ノ語尾ヲ
○ 形ニ表スコト、コルゴロ、言葉ノ聞取り等ヲナシ色々ノ馳走ニ満腹シテ帰ル
- 三日 内村君遅刻ス
- 四日 吉田君小樽へ出発ス
- 六日 多嘉良憲門限ニ遅刻ス
吉田君本間君帰舎ス
食時〔事〕明日ヨリ
- 七日 上野君帰舎ス、食時〔事〕明日ヨリ
読賣新聞 十六銭五リ 森岡君
タイムス 十二銭五リ 鈴木君
- 八日 始業式
- 九日 瀬戸太一君蠣崎鉄太郎君帰舎ス
カルタヲ遊ブ、石澤達夫君ヨリ菓子ヲ寄附セラル
上野君岩見沢ニ旅行ス
- 十一日 上野君食後帰舎ス
- 十六日 瀬戸、蠣崎ノ両君小樽へ旅行ス
- 十七日 鈴木限三君足ヲ痛ミ昨年十一月ヨリ札幌病院ニ入院中ナリシカ幸ヒ全快セシニヨリ今日午後退院セラル
- 十九日 瀬戸君蠣崎君午後
- 十七日 瀬戸君帰舎ス、食時〔事〕ハ明日ヨリス
- 十八日 蠣崎君帰舎ス

廿日 梶正雄君退舎ス

林基一君ストーヴヲ止ミテ炭ヲ用ユ

廿二日 丹羽君 有届外泊ス

廿五日 月曜日

去ル土曜日ニ月次会ヲ開クヘキ筈ナリシガ札幌農学校本科予科合同之会アリシガ為メニ次ノ土曜日ニ延期スヘキノ処、副舎長ヨリノ御話アリトノコトニテ本日開会ス、其要旨ハ暴風後ノ快晴ヲ望ムトノコトニテアリタリ。十時半閉会ス

廿六日 森岡君退舎ス

廿日 朝食後、林基一君、上野君遠足セラル、川村君、森岡君、蠣崎君ノ送別会ヲ開ク

廿一日 川村君、蠣崎君退舎セラル

林君、上野君帰舎セラル

二月五日 多賀良憲君家事都合ヲ以テ退舎セラル

〇〇〇〇日

東洋の風雲愈急なる今日午後六時三十分頃一葉の号外は其声勇ましく舞ひ込み、其報ずるところは何ぞ、曰く

愈々開戦に決す

露国日本共に開戦に決定、〇〇艦隊昨夜〇〇〇出発、各師団今明日中〇〇〇下るべし

此夜動員令下れりとの事にて伊藤水車場

主も招集せられ、明朝出発すとて暇乞の為め来る。

鈴木勇一君門限に遅刻す

朝倉金彦君炭を用ゆ

二月六日 今夜亦北海タイムスハ号外ヲ発セリ、其要ハ

第七師団之繁忙

昨夜第七師団にては何処よりか一通の至急電報来るや俄かに参謀部総出にて非常の繁忙を極めたり、

函館区にては只今飛電に接し一般に敵愾心頗ぶる勃発ゼリ

旭川郵便局にては徹夜至急電報之配達に従事セリ

海事動員令

海軍予備役下士官動員招集せらる、其内、水兵、機関兵に在ては昨三十五年一月一日前現役を離れたるものを除く

近衛及第十師団動員令

近衛師団第一及第六動員、第十師団動員の第一日は二月六日とす。

第七師団動員令

第七師団第七動員を命ぜらる、動員の第一日は二月六日なり。

動員令別報

詳細号外にあり。

昨夜海軍全部及近衛師団動員令下る、並〇〇砲兵へ動員令下る

林基一君、上野良太君、朝倉金彦君は予科同級生田中近衛歩兵総長（一年志願）送別会にて門限に遅刻す

二月八日 本日月寒歩兵第二十五聯隊ヨリ将校以下下士卒十二名守備之為メ「ルッツ」ニ派遣せらる時、各望遠鏡を持てりとは時節柄注意すべきなり。

午後八時五十分号外来る、別紙の如し。

二月十日 快なる飛報あり、我艦隊の為め露艦撃沈せらる、詳細号外にあり

二月十一日 各学校紀元節拝賀式あり

我 皇室に於ては本日の佳節を期し露国に対して宣戦の詔勅下る 起て我國民 振へよ日本刀を!!!

露国何ぞ我に敵し得ん 彼が大胆驚くの外なし 函館港に露国汽船一艘あり、動くに石炭なく之を買ふに金なし、是亦一つの天罪？

二月十三日 鈴木勇一君都合により退舎せらる、此夕、さきに退舎せられし多嘉良憲君と鈴木勇一君との送別会を催す。会后委員の補欠選挙を行ふ、左の諸氏に当撰す

文芸部 上野君、田下君、畑君

運動部 羽生君

書記 鈴木限君

丹羽君は今日よりストーブをやめて火鉢を使用せらる

二月二十七日 此夕月次会あり、ライスカレーに腹を膨らし午後六時半より開会す、本間君の山本権兵衛大臣の禁酒の話、田下君の寄宿舎に於ける自治制に就きての感あり、次に朝倉君は龍のたとへを以て吾人青年ハ幾多の窘苦をも忍びて成功の道に達すべきを語りて、それより高松君のバクテリアの恐るべきことに就きて話あり、宮部舎長此時来らる、それより討論会を開き「教育を受くるに都会と田舎とは何れか可なりや」に就き討論す。後、宮部舎長より、この題につき諸外国の例を引きて講評され続て、友を選ぶことにつき御話ありき、その後、林檎菓子に皆、ストーブを囲みて雑談す。

散会は午後十一時。

去廿四日、我艦隊の第三回旅順攻撃の報到る、我れハ運送船五隻に石を満載して旅順港口を封鎖せんとして三隻は途中にて沈められ、2隻は略目的を達せりと。

三月三日 〇〇〇ついたちすぐる三日となれば姑時〔射〕の松はかぜに笑み千年にいろいよ※※ふかくなりまさり羅浮の梅はあめにものうちいひてまれなる香のいよ※※清くなり鶯のはつこえいとおほどかになきいでたるころなるべきに、之はたゞ内地のけしきにて札幌の天地はなほも雪の中に埋まりて人をなぐさむべきもあらず。唯月のみはいとかすみてをもしろく軒端に下るつらゝにてりてそのけしきいひしらず、たぐひなきにもすみなれし古里のそらまづ思ひ出でられてそゞろにむかし恋しく思ひつゞけられけむ。わが舎の鈴木限三君は今日札幌の地を後にしてとももの都にぞむかわれける、君がこの地を去りしは古里恋しきにはあらず他にことほりのあればなり。

君がこぞみそぎする夕の冷気いとすゞしくしてきのふけふみづのひゞきのいとすみてき
こゆる初秋のころいつくしみふかき父母にわかれ姉妹にいとまをつけて学の道にこの地
に遊び通学せしもつかのまさゝいのきづより入院しよう※※としたちかくりて、睦月半
ばすぎつるころ退院せしも再びあしくなりいよいよ帰こくに定められぬ、われら友から
はまことに君の同情にたへぬなり、この日それも何となくなかれむごとく、あさまだき
よりくもりてかぜみぞれはげしく、われらは停車場まで見送る。われらは君の早く来ら
れん事をまち札幌の天地また君をまつめり

新聞入札

読賣新聞 九銭 羽生君

北海タイムス七銭五リ 羽生君

三月十二日 札幌中学校 学年試験始まる

三月十九日 札幌農学校第二学期試験始まる

札中第一年級のみは今日を以て学年試験終はり、
仲尾仲太郎君廿一日午前一時帰舎ス、証明書ナシ

三月二十三日 村上雄之助君帰省ス

三月二十五日 本間重一郎君帰省ス

三月二十五日 瀬戸太一君小樽ニ旅行ス

三月二十六日 札幌農学校第二学期試験終る

食堂賄場入口に「本日午後一時より午後五時まで何人も出入することを許さず」との禁
札あり、吾人は將た何故かと怪しみしに後にて思へば月次会のご馳走の準備にてぞあり
し、午後六時半より月次会を開く、上野君は「半歳余雪にとぢられし吾等が垣根もえ出
づる若草と共に全吾人の活動すべき時は来れり」とて開会の辞あり、次に丹羽君の品性
の函養、吉田君の **Spiritual Elasticity Stout Know** 及石澤副舎長の戦事国民の心得より
説き及ぼし種々の方面に渉れる各演説あり、次に委員の改選ありて左の諸氏当撰せり。

七点 羽生氏俊君

〃 畑 一郎君

六点 吉田守一君

〃 朝倉金彦君（再選）

運動部

高橋正信君（再選）

上野亮太君

文芸部

田村子〔輿〕吉君

林 基一君

このときはるか賄場の方に「カチ※※」と皿の音の聞えしかばはて今日の御馳走は愈口
に非ず何なるかとまつほどに本日の本口は「をはぎ」なり、石澤君は直ちに試験と云ふ

三途の川を渡りて彼岸に達したからをはぎだと洒零を付け、月次会委員諸君（吉田君上の君）の御骨折をはぎの砂糖の塊と共に味〔甜〕くあじはひ、尚其上の御馳走は月次会の副官林檎なりき、夫れより各自面白き話ありて十時散会せり。

三月三十日 高松進三君入舎ス、君ハ高松正信君の弟君にして此度東京麻布中学より当地に転校せられたり。

三月三十一日 札幌中学校生徒田下政活君、今回同校を卒業せられ同時に当舎を去りたるを以て当日午前十時より送別会を開く。

宮部舎長の出席アリタリ。

午後七時より委員会を開き以後麦飯にせん事を議し、結局、舎生一同の意向を聞きたる後の事に決す。又賄方の火を朝迄で燃くことを禁じたり、魚屋の事を議したるに不得要領に終り、衛生部の方にては建物の囲りを掃除することに決す。

テニスコートのリミットを針金にてすることを決す〔この項、墨線で削除〕

新委員の役割次ギノ如シ

賄委員 羽生氏俊君

会計委員 朝倉金彦君

衛生委員 吉田守一君

書記 畑 一郎君

四月一日 ○○朝倉、林、高松、小高松、羽生、瀬戸、畑等七氏ト共ニ定山溪ニ向ッテ出發ス、途上樹木茂レル森に當リテ数羽の鳥枝ヨリ枝ニカケ回り居タレバ銃ヲ肩ニセシ朝倉君直チニ雪深キ林ニ分ケ入り漸時ニシテ一個ノ獲物ヲ携エ来レリ、行クコト数丁ニシテ又ター羽ノ鳥ヲ得タリ。既ニシテみそまっぷに到レバ白西山ニ没セントス、此ニ於テ余等大ニ急ギテ歩行ス、行クコト一里斗リニシテ日全ク没シタリ、暗夜人ナキ山中ヲ辿リ行ク、大勢トハ云ヒナガラ実ニ心細キコトナリシ、加之十一時ヨリ一物モ入レラザル腹ハ此時倒レン斗リニ飢エタリ、此ニ於テ雪ヲカヂリテ少シク元氣ヲ付ケ辛ウジテ到着セリ、時ニ午後八時、此ニ於テ携エ来リシ米ト豚肉トニテ十時頃食事ヲナシ入湯後十二時頃寝ニ就ク。翌日早朝、朝倉君、高松君銃ヲトリテ外出シ、近傍ノ林中ニ於テ山鳥三羽ヲ得テ歸り来レリ、余等其手際ヲ激賞ス、午後朝倉君先刻のウマ味ヲ忘レ兼ネ、又々銃ヲツイテ山中ニ到ル、居ルコト数刻其獲タルモノハ山鳥二羽及びカケシ、木ツヽキ等数羽ナリシ、此日ノ昼飯、夕飯ハ鳥ノスープ、焼鳥、豚肉ニテ食事シタリ、殊ニスープ、焼鳥ハ無上ノ珍味ナリシ、此日ハ食ヒ遊ビテ愉快ニ前日ノ勞ヲ癒シ其翌三日午前八時当地出發、途中ノ絶景ヲ賞シツヽ足ヲ運ブ。森林科ノ鈴木某ナル人一行ニ加ハル、石山ニ到リテ昼飯ヲ食シ、真駒内牧場ニ馬ヲ見、帰舎セシハ午後六時、此一行ニ副舎長石澤氏モ加ハル積リナリシガ都合ニヨリ同行サレズ、田村君オヤフルニ行ク

四月二日 逢坂信悉君入舎、食事ハ昼飯ヨリ

同君ハ前入舎セシ人ナリ（本科二年）

四月三日 定山溪ニ行キシ一行帰舎ス

田村君オヤフロヨリ帰ル

四月四日 札幌農学校予修科生徒徳田義信氏入舎

同 斎藤蔵之助君入舎

吉田君小樽方面ニ行ク

本日ヨリテニスヲ初ム

四月五日 丹羽八郎君退舎、午後 0 時半送別会ヲ開ク

吉田君小樽方面ヨリ帰舎ス

四月六日 半澤君仙台ノ東北学院の入学試験を受くる為め午後一時出発

本間君本日帰舎

室替の結果左の如し

第一号 上野君 半沢君 大島君

第二号 田村君 今 君

第三号 畑 君 村上君

第四号 朝倉君 高松進君

第五号 斎藤君 松尾君

第六号 辻中君 林 君 瀬戸君

第七号 林 君 瀬戸君 辻中君

第八号 徳田君 本間君

第九号 藤井君

第十号 逢坂君 仲尾君

第十一号 高松君 羽生君

第十二号

四月七日 室替を実行したり

今興太郎君入舎ス (札中四年)

四月八日 藤井為二郎君入舎ス (本科二年)

茶話会を開く (午後八時)

農学校及札中ハ本日より授業開始す

四月九日 村上君帰舎す、食事晩より

村上君の御馳走あり

四月十七日 辻中寿治君入舎 (予備科一年)

食事晩より

四月十八日 斎藤君家兄病気の為め郷里秋田へ帰国す (食事昼飯きり)

委員会を開く

四月二十三日 例ニヨリ月次会ヲ開会ス、当番ハ一号室ノ上野君、二号室ノ田村君、今君

ニシテ宮部先生及藤岡農学士モ出席サル、演説者ハ来賓藤田農学士の洋行談、徳田、辻中、逢坂の諸君ニシテ散会ハ十二時頃、此会ハ近頃ニナキ盛会なりし

四月二十五日 仲尾君帰舎す

四月三十日 大島五郎君入舎す（森林科二年）食事ハ一日ヨリ

五月十三日 斎藤君帰舎す（食事晚より）

五月十四日 農学校ニ遊戯会アリ、当舎生朝倉君各科選手ノ一人トシテ出走シ四分ノ一英里ヲ僅カ四十四秒ニテ廻リ遂ニ第一等ノ名誉ヲ担ヘタリ、実ニ同校開設以来始めて出ダセシモノナリト云リ。

五月十六日 舎生中ノ最古参タル吉田守一君退舎セラル

午後五時ヨリ朝倉君ノ祝賀会ヲ兼ネテ吉田君ノ送別会ヲ開キタリ

衛生委員吉田君退舎ニ就キ同委員ノ選挙ヲ行フ。其結果左ノ如シ

当選 七点 徳田義信君

次点 四点 逢坂信彦君

五月二十二日 委員会ヲ開ク。此会ニテ議シタルコト左ノ如シ

一、本月ノ月次会ヲ三十一日（火曜日）行フ事

一、月次会ニ於テ麦飯断続ノ可否ヲ定ムル事

等ナリ

五月二十五日 札中修学旅行ノ為メ、今君、瀬戸君、高松進三君、本間君、仲尾君等出發シタリ

五月二十七日 仲尾君帰舎

五月二十八日 瀬戸君、高松信三君帰舎

五月二十九日 本間君、今君帰舎

五月二十五日 石沢君公務ヲ帯ビテ出張サレタリ、〔この項、五月二十五日へ挿入の矢印を付す〕

五月二十九日 会計決算ヲ行フ

五月三十一日 例ニヨリ月次会ヲ執行ス。当番ハ三号室ノ村上君、畑君、四号室ノ朝倉君、高松君ニシテ宮部先生、松村理学博士モ出席サレ出張中ノ石沢君モ態々出席ノ為メ帰舎サレタリ、演舌ハ村松博士ノ独乙ノ話、松尾君ノ九州製鉄所ノ話、今君ノ就学旅行ノ話等アリ、演説了リ告グルヤ、茶菓饗応アリ、其レヨリ権助ナドヤリテ散会セシハ十一時頃ナリシ

同月同日 辻中君退舎ス

六月一日 石沢君公務ヲ帯ビテ出張シ同日帰舎

新聞競売ノ結果左ノ如シ

読売新聞 貳拾銭 逢坂君

タイムス 七銭 羽生君

六月二日 辻中君再ビ入舎ス

六月四日 高松正君修学旅行ノ為メ出發ス

六月五日 高松正信君帰舎ス

六月六日 ○○テニス大会ヲ催ス、此日天気晴朗ニシテノ微ダモナクテニスノ遊ビニハ
実ニ得難キ日ナリシ、最初ハ紅白勝負ヲ行フ、其結果次ギノ如シ

紅	白
1 高松 村上	7 羽生 辺見
2 齊藤 上野	8 大島 仲尾
3 朝倉 藤井	9 林 瀬戸
4 逢坂 辻中	10 徳田 畑
5 本間 松尾	11 高松進 今
6	12

右了リシ後五人抜キヲ行ヒ、上野君、高松君ノ組之ニ勝チタリ、アンバイヤーは、吉田
守一君ニ頼ミタリ、豚飯ノ馳走ナドアリ中々盛会ナリシ

六月七日 本間重一郎君新潟県ノ中学校へ転校ノ為、退舎ス

六月八日 石澤君出張ス

六月十一日 石澤君帰舎、食事ハ十二日ヨリ

六月十五日 札幌神社祭礼ニ付餅ヲ御馳走シタリ

六月二十四日 石沢君出張ス

六月二十九日 石沢君帰舎ス

六月三十日 例ニヨリ月次会ヲ開ク、演説者ハ高松進三君、瀬戸太一君、大島君等ニシテ
当日ハ記念ノ為メ竹〔武〕林ニ於テ宮部舎長等ト共ニ写真ヲ取レリ

七月一日 本日ヨリ農学校ノ暑中休暇トナル

七月二日 石沢君出張、藤井君、田村君旅行
持田安序君入舎（中学三年）食事三日ヨリ

七月四日 辻中君、上野君漸次退舎
石沢君帰舎ス

七月六日 林君旅行ス

七月八日 羽生君、大島君旅行ス
石沢君出張ス

新聞入札ノ結果左ノ如シ

読売	拾三銭	大〔逢〕坂君
タイムス	拾銭	〃

七月十日 林君帰舎ス

七月十三日 高松君旅行ス

七月十五日 斎藤蔵之助君、畑一郎君帰省す
石沢副舎長帰社ス 但し食事セズ

七月十六日 林基一君夏休之中、南六条西七丁目戸村光雄○○○移ル

七月十八日 大島五郎君帰舎ス

寄宿舎ニ鶏七羽ヲ購入ス

七月二十日 高松正信君帰舎ス、但し食事ハ二十二日より

七月二十五日 辻中寿治君帰舎ス

七月二十六日 瀬戸太一君帰省ス

仲尾仲太郎君帰省ス

〇〇〇七時より茶話会を開く、食堂にて暫く語らひたる後、一同打連れて博物館内 Elm
ノ下に清き月を称赞し、先づ第一に逢坂君の吟詠〔欄外に「長恨歌等」とあり〕あり、
時に遙に影暗きエルムの下よりハモニカの奏する音を聞く。恰も天女が奏せる如く遠き
より来りて遠きに行けり〔欄外に「しらべの主は誰ぞ、云はずも知れた高松君」とあり〕

All the time sweet music rained through the air until

其外思ひ々々の興をなし十一時頃帰る、実に〇〇〇

〇〇〇庭球コート新設の爲め出面二人来れり、本日も来る。

七月二十七日 持田安序君帰省ス

村上雄之助君帰省ス

今興太郎君帰省ス

辻中寿治君病氣之爲め北辰病院に入院せり、大ニ気毒なり

八月四日 松尾君札幌病院に胃痛にて入院せらる、天何ぞ無情なる。

八月八日 高松正信君、高松信三君余市ニ旅行ス、されど中途より引返されし由

八月九日 晴

午前八時、朝倉君砂川へ旅行す。

入院中なりし松尾君帰舎す。夕飯より食す。

太陽戦争実記来る

八月十日 晴

美満津より寄宿舎へ宛て書中見舞状来る。

鈴木進三君より同じく葉書来る。

八月十一日 晴

午前六時、高松正信、進三両氏余市地方へ旅行さる。

午後三時、松尾君には療養として当分北八条西三丁目菊池方へ止宿せらる

向井商店の暑中見舞として団扇二本まいこみぬ。

副舎長石沢氏不快の様なりしは氣之毒と云ふ外なかりき。

昨日今日の暑さなかなか内地も劣らぬ様にて午後二時より三時にかけての暑さには、身
の置き処なき迄ももがきあせる連中もある。されどさすが北海の印にや午後七時、八時
頃散歩には何か上衣のほしき心地そすめれ。

八月十二日 午後二時頃一雨は来りて頓に冷しくなりホット一息つきぬ。

昨今僅かに五名、静かと云はゞ静かなる、淋しきと云はゞ淋しかりけり。

時に夕暮散歩するもの、病院を見舞ふものありて舎内皆無の様、止むなく臂かたむけな

がら誰か早く帰らないかと鶴首して友の帰舎を待つ、そ舎内の昨日今日をし計られて余さず』

午後六時、石沢副舎長の令弟来舎夕飯より食せらる

九時半一同縦覧室に会合、土産の翁飴、豆銀糖の饗応を受けたり。

八月十三日 晴

暑さ甚し、井戸掃除をなす。

八月十四日 晴

午後六時、高松両君帰常す、食事なし

午後九時号外の声かすかに聞こえぬ、その声などなく壮なりければ定めし快報なりと思ひつゝ、声の近づくを待ちぬ。

号外の声で舎生一同ソラと立ち上がりぬ、取る手遅しとながむれば、頃日、常陸丸一件より名声上かりをりし上村指令長官よりの公報にて本朝、対馬北方にて浦塩艦隊三隻に会し激戦五時間、リュリツクを撃沈し、他の二隻に大損傷を与へしと、噫快なる哉、再参暴行を加へし浦塩艦隊今はたして如何なる夢をや見る。

八月十五日 晴

むし暑く何だか身体が腐敗しそうな心地する計りにて雨がふるを待てばバラ々バラと二粒、三粒ふるのみにてます※※むし暑く閉口この上もなし。

八月十六日 晴

記すこと何もなし。

八月十七日 晴

七夕祭にて市中いとにぎやかに小児小女のかよはき右手に赤き提灯ぶらさげて七夕歌の声いと面白かりき、いつもにしぬさかんにて武者装の引ものもあつて恰も小供連の提灯行列とも思はるゝ計り赤提灯の者多かりき。七夕や秋をさたむるははじめの夜 芭蕉

八月十八日 晴

〇〇石澤副舎長の室へ盗賊は入りて云ふも気の毒計り奪ひさりしとは、噫何たる不幸ぞ、日頃注意周到なる氏の室に入るとは、窓を開きよき賤物を持ち去りしとは御気の毒の至りと云ふ外なし、舎内に以後再び盗難を見ざる様窓の仕末を充分にする事となれり。

八月十九日 晴

暑さ厳しく扇団扇もその効なかりき

「あふけあふけ何処が王土なら団扇」とよみし宗因もかゝる日にもものせしならん。

鶏の砂にすり込む暑さ哉 豊 国

二本目の扇をおそる暑さ哉 嵐 蘭

八月廿日 晴

午前七時 朝倉君帰舎されたり

昨日はより尚暑く身の置き処なかりけり、雷は遠く聞ゆるも近く色もなく、ウツトリと暑くむし、雨なくして如何で堪へなん計りなり

午後一時華氏九十二度（札幌測
八月二十二日 華氏九十五度
高松正信君近文小林牧場ニ旅行ス
八月二十五日 鈴木限三君来れり!!!
札幌の天地皆君を迎へたり!!!
健全なる鈴木君来れり!!!
八月二十九日 村上雄之助君帰舎ス
持田安序君帰舎ス
帰省中なりし中学の諸君は、漸く再び笈を我舎に運べり、高松信三君顔色よし、今夜村
上、持田両君土産菓子御馳走あり。
八月三十日 大嶋五郎君苦小牧学林に旅行せらる、午前四時出発せられたり。
八月三十一日 盆も漸く過ぎて秋風すゞし。
今君帰舎す。
札幌農学校予修科一年級ニ今年入学せられし吉田新七郎君入舎す、君は滋賀県の人なり。
会計報告
八月分 七円九銭（舎費共）
競売之結果
中学世界 七銭五リ 今 君
太 陽 十五銭 持田君
九月三日 中尾仲太郎君帰舎ス
九月四日 田村与吉、瀬戸太一の両氏帰舎ス
在旭川高松正信君より来信あり。
太陽 戦事実記（二十四号）来る
号外来れり、何ぞ、曰く
遼陽陥落公報!!!
区民ハ熱せり!!!狂せん許りなり。
九月五日 此日、午前九時より大通ニ於て戦勝祝賀会あり、夜間は提灯行列などもありて
非常の雑踏を極めたり。
新聞競売の結果
十銭五リ 読売新聞 吉田君
三銭 タイムス 朝倉君
大島五郎君帰舎す
九月七日 清水義雄君入舎す、君は本年予修科の新入学生にして東京府の人なり。食事は
八日朝より。
九月九日 高松正信君、上野亮太君帰舎す。
九月十日 羽生氏俊君、斉藤蔵之助君帰舎す

食事ハ十一日朝より

田中元治郎君入舎せらる、予科一年にして滋賀県人なり。

午後八時、田中君の紹介あり。

羽生君の御土産あり。

九月十一日 事故なし

大通に於て戦死者弔魂会あり

九月十二日 札幌農学校新学期始まる。

九月十三日 林基一君退舎せらる。

九月十四日 高松正信君赤岩地方ニ旅行せらる。

九月十八日 予修科一年松尾悌七郎君入舎せらる、新潟県人。食事十九日朝より。

九月二十日 畑一郎君帰舎せらる

九月二十一日 夜十一時過藤井孝次郎君帰舎す、〇〇津軽海峡大暴風雨にて船の航行〇〇
〇なりしが為めなり。

九月二十二日 午後六時半より新入生諸氏の歓迎会を兼て月次会を開く。高松正信君司会
せらる。次ニ持田安序君之演説あり、曰く「諸君宜敷願ます」と拍手あり。次ニ朝倉金
彦君之新入舎生諸君に対する歓迎の辞、次に清水義雄君之挨拶、鈴木限三君の演説あり。
次ニ逢坂君之演説、石澤副舎長の演説、宮部舎長の経歴談等ありて茶菓ニ移る。後、余
興として権助あり、十一時三十分閉会す、盛大なりき、本日委員改撰あり、石沢副舎長
の発生にて、朝倉君が長く会計事務を取られしを感謝す。

新委員

衛生委員	上野亮太君
文芸部兼書記	斎藤蔵之助君
会計委員	鈴木限三君
賄委員	田村与吉君
運動部	
	高松正信君
	朝倉金彦君

亦部屋替あり

一、	松尾君
	村上君
二、	羽生君
	今 君
三、	畑 君
	仲尾君
四、	朝倉君
	田中君

- 五、 齋藤君
吉田君
- 六、 藤井君
鈴木君
- 七、 徳田君
瀬戸君
- 八、 高松正信君
清水君
- 九、 田村君
高松進君
- 一〇、 逢坂君
上の君
- 一一、 大島君
持田君

高松正信君旅行先より帰舎ス〔この項、墨引きで消去〕

- 一二、 杉原君
速見君

九月二十三日 曇り

秋季皇霊祭

九月二十五日 杉原行二君入舎す、君は秋田の人にして本年土木工科の新入生たり、食事は明朝より。

この日、月寒聯隊に軍旗祭あり、舎生の散歩がてら杖を曳くもの多かりき。

九月三十日 藤井為二郎君明日退社さるに付き、午後八時より同君の送別会を開く。

十月一日 午前、藤井君退舎さる。

札幌中学に運動会あり。我舎生清水君には〇〇競争に二等賞を得らる。

十月二日 ○緑葉の春より烈陽灼々たる盛夏も過ぎ今や秋色深く漸瀝たる石狩原頭の氷雪の裡に苦吟の身となるも近きにあるべし、我等北海ネーチャ―に親しむものこの期を逸せばまた殆ど半歳の間活動し能ハざるなり、茲に於てか我舎運動部本日をトレテニス大会を催せり（午前八時より）

当日の仕合番組次の如し

紅組	白組	西寮	東寮
村上君	高杉君	高杉君	羽生君
速見君	羽生君	速見君	村上君
齋藤君	上野君	上野君	齋藤君
朝倉君	仲尾君	清水君	仲尾君
吉田君	清水君	大寫君	吉田君

瀬戸君	大寫君	瀬戸君	朝倉君
逢坂君	鈴木君	逢坂君	畑君
杉原君	高進君	徳田君	鈴木君
徳田君	畑君	杉原君	今君
今君	田中君	高進君	畑君
田村君	田中君	持田君	松尾君
持田君	松尾君	田村君	田中君

零時三十分散会、昼豚飯の御馳走ありき

十月三日 本月分 讀売新聞、タイムスの競売あり。

讀売 二十八銭 鈴木君

タイムス 八銭 朝倉君

高松正信君修学旅行として本日午前定山溪に向はる。

十月四日 仲尾仲太郎君退舎さる。

十月五日 高松君旅行先より帰舎す。

十月八日 札中運動場にて農学校本科対予科の野球仕合あり。三十二点に対する三十三点にて未曾有の好勝負。当舎より高松君（本科）、吉田君、清水君、斉藤君（以上予科）仕合に加わる。

十月十二日 札幌中学校に発火演習あり。

十月十三日 札中の慰勞休暇。

夕飯後秋季遠足に就き一同相談の結果、定山溪と決定。

十月十五日 師範運動場ニテ札幌各校選手の野球仕合あり。〇〇の高松正信君、速水君出陣せり。

十月〇〇日 天候不穩の兆あり、定山溪行を見合す。

石沢副舎長巖父の訃音に接し、当駅二番にて帰国の途に就かる。舎生一同停車場ニ見送る。人生の悲惨ハ逝御し北邙の苔に入るより悲しきはなし、噫自愛深き巖父に訣れし人の心情はたいかに。

午後六時三十分より月次会を開く。余興なしに十時頃散会せり。

藻岩に紅葉狩りを試むる男生女生多かりしと。

十月十八日 札中運動場ニテ師範対札中の野球仕合あり。一点に対する六点にて后者の勝に帰せり。

十月二十日 月寒聯隊征途に就く。行く者ハ死を盟ひ、送る者亦生還を期さず、忠死はされ武人の榮譽なれど私情豈萬斛の涙なからんや、北海人士意ふてこの行を送る。

十月二十一日 本日を以て二十五聯隊の輸送終はる。

村上君シコツコ方面へ旅行さる。

十月二十二日 師範運動場ニテ農学校対師範の野球競技あり。二十二点に対する二

十八点にて農校の敗となる。当舎生高松君出陣す。

十月二十三日 手稲に初雪降る。

十月二十四日 村上君旅行先より帰舎さる。食事晩より。

十月二十五日 農学校学生生徒一同マコマナイニ遠足会を催ふし、午前八時出発、午後三時無事帰校す。

大寫君都合により退舎さる。

十月二十六日 農学校の慰労休暇、本日よりストーブを据付くる部屋もありき。

十月二十七日 北海の天地漸く寒く喝々としてより早くより、より晩くまで響けるコートの声もア、冬が来た、ア、寒むいななどの女々しい嘆声と変って仕舞た。

十月三十日 雪ハちら※※向ふ嵐などと洒落れて居る間は雪もなか※※風情もあるが、こうもやられては堪ったものではない。今日は日曜であるのに遠慮もなく朝っぱらから降り始め今日はテニスのテの字も出来ずラケットは柵で青息をふきボールは箱の底に縮んで舎生は丸くなってこの塵くさき寄宿の隅に籠城の身となって仕舞た。

十月三十一日 夕飯后新聞の競売あり

読売 二十八銭 清水君

タイムス 十六銭五リ 朝倉君

十一月一日 大に雪降る。

十一月二日 柳川秀興君入舎す。君は讃岐の人にして予修科二年に在学。食事明朝より。

十一月三日 天長の佳節ニ就き各学校の参賀式あり。

当舎に於ては昼豚飯の御馳走ありき。

十一月六日 畑君、田村君、修学旅行として旭川方面に向はる。

十一月八日 田村君、畑君帰舎せらる。

十一月十日 今君令弟の訃音に接し、今朝帰宅せらる。為めに舎より哀悼の状を送れり。

十一月十二日 午後一時三十分より札中にて農校対札中の柔術、撃剣の仕合あり。

舎生朝倉、上野、杉尾、田中の諸氏出陣せり。

十一月十五日 朝倉君不快の為め今晚より外泊（保証人の宅に）せらる。

十一月十九日 ○○にて学芸部の演談会あり、舎生の逢坂君には○○○の真髓に就き雄弁を振ふ。

十一月二十二日 午後五時三十分より月次会を開く、宮部舎長の臨席ありて、経歴談を述べらる。午後十二時散会。

当日の弁士、吉田君（利己主義）、田中君（個人的の誤楽と公共的誤楽）、松尾君（中学時代の生活に就き）、杉原君

十一月二十七日 舎生辻中寿治君には郷里鳥取にて死去せりとの悲報あり。

十一月二十八日 辻中君の令兄に哀悼の意を申送れり。

十一月二十九日 本月の会計決算報告出づ曰く、一人に付て八円十一銭と。

二十五聯隊補充一中隊征途に就く、見送りの為め雑踏を極む。

十二月二日 新聞の競売あり

読売 十六銭 杉原君

タイムス 二十三銭 朝倉君

十二月四日 石沢副舎長帰舎され一同停車場ニ迎ふ。寒気烈しく深更より大吹雪となる。

十二月十日 晴

二十五聯隊補充一中隊許り征途に就く。

十二月十一日 同上、各校の生徒大にこの行を送る。

夕方より暴風になる。

十二月十四日 札幌中学校の第二期。農学校の第一期の試験本日より始まる。

十二月十五日 札幌私立中学の二期の試験本日より始まる。

十二月二十日 札中、農校の試験本日にて終了す。

十二月二十一日 私立中学の試験了はる。

二十五聯隊補充一中隊許り戦地に向け出発す。

午前ハ持田君、午後ハ清水君帰省せらる。

十二月二十二日 今君帰省せらる。

十二月二十三日

朝来静穏而し薄曇った空から重そ一な大口雪が絶へず降り続いて午後になると地ハ勿論、家から木から山から電線も電話線も皆雪で彩られ北海の景としては余り珍しくもないが兎に角一種異様の景であった。

特に此日を以て第八回之記念祭を挙げ様とする我々には此平和な美しき日は何んかの陽祥の如く感じられた。準備委員は其朝から一生懸命其豊富なる頭脳をしぼり意匠をこらしたからやがて定刻五時になると、嚙亮たる楽器のかわりあい※※たる歓声は何処となく聞え、其薄く黒びたる壁も六年の歴史をその面に記しある如く思われ一層旧懐の感想を与へた。而して賓客として皆是れ吾人の今ある如く八年の昔いと愉快に、噓〔喧カ〕しく此寄宿舎に養はれたる時の年ふる今は八歳の年を種々の経験を経テ確かに向上の一步を進め是に列せられたもの。

食卓には真っ白な「シーツ」を敷き宮部舎長を中心として指定されし賓主隔てなき席には食事委員の手になる二三の壺載せられ、一同着席するや客も又八年の昔に若帰った様に歓声雑話の間に食事を卒へ、七時になると改まって式行われた。式場の前面には、黄栗面中小豆の赤で記念を物され青々たる松葉の輪画の額かけられ前面の机上には松竹梅のいと御念のいった花瓶乗せられ。

賓主各々円く火鉢を取り囲み席に付くと田村君は開会を告げ

一、富原書記は昨年来の舎務の報告及び文学部の事を報告

一、高松運動部委員は同じく同部の会計其他を報告

一、鈴木会計係は昨年十一月以来本年十月迄の会計報告

右報告終ると石澤副舎長は当記念会の延びし事、及当寄宿舍の創立以来の目的及経過を陳べ且つ今後の希望を單簡に説かる。

次に柳川君は新入舎生を代表して短演説を試みられ、柳川君演べ終ると田村君は来賓歓迎の辞を演べたり

来賓惣代竹尾君の答辞あり。

次に宮部舎長の演説あり。

是れにて将に式を終へんとするとたん

田村君は立て、起立宮部舎長の労を謝せんことを提議す、一同起立するや宮部舎長より御挨拶あり。

是れにて全く式終へ余興委員の経営に係る千変万化抱腹絶倒の余興は是れより始まり

賓主茶菓を喫しつゝ、意匠の妙なる、奇なる、研学余念なき学生の脳中裕々斯の如き閑あるやを怪ましむ。

其順序は左に

福引、一寸法師、催眠術、活人画（美人観音）、新派剣舞、蓄音機、ハーモニカ、歌独吟、影画（林檎売、農園の朝、勉強家、そばや、満作舞）

福引披露

寄附

- | | |
|--------|-------|
| 一、金壺円 | 宮部舎長 |
| 一、鶯三羽 | 石澤副舎長 |
| 一、蜜柑一箱 | 黄金井君 |

来賓

宮部舎長

広瀬君、竹尾君、吉川君、橋本君、吉田守一君、竹田君、藤井君
右終つて月次会に移る

決議

賄婦俸給来年一月より三円に増加之件

委員選挙

常務委員

羽生君、柳川君、朝倉君、徳田君

次点者 田中君、吉田君

運動部委員

高松正信君、吉田君

次点者 逢坂君、富原君、松尾君
是れにて月次会終へ歌かるた会始まり勝敗数回、時計十二時を抜する頃、興をさき、解散。会場復旧は会場係に委す。

十二月二十四日 朝来晴

吉田君は岩見沢方面へ旅行

晩にはライスカレーなどあり。本日夕方、伊藤水車場にて水車に足を入れたるものありしも一同かけつけ手伝へ、単に負傷のみにて事なきを得たるは幸なりき。

今夜独立教会日本キリスト教会のクリスマスあり。

十二月二十五日 午前は雪数寸積る。

午後三時頃より再び降り出す。

吉田君帰舎

十二月二十六日 午前八時四十五分二番列車にて将校数名征露ニ出発さる、皆見送る。瀬戸太一君クチアン〔倶知安と傍書〕ニ旅行す。

十二月二十七日 上野君幌向の方へ出張さる。

十二月二十八日 瀬戸太一、上野亮太帰舎。

十二月二十九日 寄宿舍内大掃除をなす。

当月会計決算報告あり。実費六円四拾九銭也。

十二月卅日 悠々たる新年を向へんとて何処の人も年の暮を忙しく馳け行くを見る。舎に関し〇〇〇それそ〔ほ〕との出来事なし

十二月卅一日 歳暮として金壹円五拾銭賄婦ニ、金六拾銭速見に送る。

午前九時、舎生一同会合して近頃速見の行為に関して相談す。彼は近来大ひに増長して副舎長の目にはよく見せて□数々〔シバシバとカナ振り〕気を付くるに反して舎生に対しては礼儀を欠き其の他言語を絶したる行為あるにより彼の位置を廃止と相談一決して不已様に談般〔判〕の為、逢坂信悉、高松正信、田村与吉の諸氏を□□談般する二時間余、語稍激したるや余音室外こもる。ついに速見暇を遣はし他のよき候補者の撰ふ事に一決して事落着す。然し速見ニは候補者のあるまで語らぬ事。

兵士二百名九時四十五分の上りにて征露ニ出発す。嗚呼忠良なる軍人よ勉よや。明日は正月元旦なるに国の為めニ父母兄弟をあとニ進まる、彼れ之心中□□□夕飯には御馳走ありき、豚飯他二三色。